

# モザンビークのポルトガル語における地名と定冠詞の共起<sup>1</sup>

鳥越 慎太郎

## 1. はじめに

本稿ではモザンビークのポルトガル語における、地名への定冠詞の使用について、大規模な新聞コーパスに基づいて分析、考察する。

モザンビークをはじめとするアフリカのポルトガル語は、これまで話者の多くが非母語話者であった性質上、個人差による特徴が大きいとされる。そのため、21世紀までほとんど研究が進んでいなかったが、2010 年代に入りポルトガル言語学会 (Associação Portuguesa de Linguística) などで研究発表が活発に見られるようになった。モザンビークのポルトガル語については Gonçalves (2001, 2013) が音韻面、語彙面、統語語彙面、統語面、形態統語面の特徴をまとめている(本稿 2.2 参照)。

一方、本稿筆者は 2018 年から 2 年間モザンビークで勤務した経験から、Gonçalves のまとめのほかに以下の 3 点に気づいた。1 つめは未来の迂言表現としての「*haver de + 不定詞*」の多用、2 つめは 2 人称 *tu* と 3 人称 *vocé* 及び動詞の語形変化の使用が個人によっていすれかに収斂していること、3 つめは地名への定冠詞使用の非体系性である。本研究では、3 つめの地名への定冠詞使用を大規模書き言葉(新聞)コーパスを分析して客観的に明らかにしていく。

## 2. モザンビークのポルトガル語

### 2.1. モザンビークにおけるポルトガル語の現状

モザンビークはアフリカの南東に位置する沿岸国で、1975 年にポルトガルから独立した。世界銀行の統計によると、2022 年現在の人口は約 3,200 万人とされる<sup>2</sup>。行政区画は 10 の州 (*província*<sup>3</sup>) と、州と同等の首都マプート市からなる。また、10 の州の下位区分として、52 の市 (*cidade*) と町 (*vila*) からなる特別区 (*autarquia*<sup>4</sup>) がある。

モザンビークでは約 40 の言語が話されている。2017 年の国勢調査(国家統計院: INE 2022a, 2022b)によると、母語としてもっとも多く話されているのは北部のマクア語(約 581 万人、26.4%)で、ポルトガル語はこれに次いで 2 番目に多く話されている(約 368 万人、16.7%)。次に、1980 年からのポルトガル語話者の推移を表 1 にまとめる。

<sup>1</sup> 本稿は日本ロマンス語学会第 61 会大会における発表を加筆修正したものである。

<sup>2</sup> <https://data.worldbank.org/country/mozambique?locale=pt> (2023 年 5 月 12 日閲覧)

<sup>3</sup> 外務省などの訳に従い本稿でも「州」とするが、モザンビークは米国やドイツ、ブラジルのような連邦国家ではなくきわめて中央集権的な国家であり、地方の自治権は低いといえるため、筆者個人としては「州」という訳を用いることに違和感がある。

<sup>4</sup> 2018 年に *município* から改称。2023 年 10 月までに 12 追加されて全 65 となる予定。

表 1：モザンビークのポルトガル語話者統計

	1980 <sup>i)</sup>	1997 <sup>ii)</sup>	2007 <sup>ii)</sup>	2017	ブラジル (2022)	ポルトガル (2022)
話者人口 (総人口比)	2,833,300 (24.3%)	6,526,080 (39.5%)	11,010,167 (50.4%)	10,535,905 (37.8%)		
母語話者 (総人口比)	123,344 (1.1%)	1,073,912 (6.5%)	2,277,014 (10.7%)	3,686,890 (16.7%)	203,062,512 <sup>iv)</sup> <sup>v)</sup>	10,467,366 <sup>vi)</sup>

<sup>i)</sup> INE (1999) から集計。  
<sup>ii)</sup> 割合は Gonçalves (2013) から。話者数は世界銀行統計の総人口から推計。  
<sup>iii)</sup> 話者数は 2017 年国勢調査表 24 (INE 2022c) から。割合は同表 1.1 (INE 2022a) の総人口から推計。  
<sup>iv)</sup> 話者数は 2017 年国勢調査表 22 (INE 2022b) から。割合は同表 8.4 (INE 2022a) から。  
<sup>v)</sup> 2022 年国勢調査<sup>5</sup>より、人口の大多数を母語話者と想定。  
<sup>vi)</sup> ポルトガル国家統計院ウェブサイトより<sup>6</sup>。

表 1 では年によって情報源が異なるため注意が必要であるが、第二言語を含めると 2007 年頃から人口の約 40~50% に相当する約 1,000 万人がポルトガル語を話す。これは 2022 年現在のポルトガルの人口と同規模である。母語話者に限定すると、1980 年時点では人口の 1% 程度に過ぎなかつたが、2017 年では前述のとおりモザンビークで母語として話されている言語のうち 2 番目に多い割合 (13.2%) を占めている。今後、首都マプート市を中心として都市人口が増大すると、ポルトガル語母語話者はさらに増加する可能性が高いと考えられる。

## 2.2. Perpétua Gonçalves の研究

前述のとおりモザンビークのポルトガル語の研究が植民地時代から独立直後まではほとんど進んでいなかつたなか、先駆的な研究者としてエドゥアルド・モンドラーネ大学及びリスボン大学の Perpétua Gonçalves が挙げられる。Gonçalves は第二言語ポルトガル語習得研究のアプローチで、1980 年代から話し言葉及び書き言葉のコーパスを構築してモザンビークのポルトガル語を記述研究した。以下、Gonçalves (2001, 2013) から一部の例を引用して、ごく簡単にまとめる。

<sup>5</sup>

[https://censo2022.ibge.gov.br/panorama/?utm\\_source=ibge&utm\\_medium=home&utm\\_campaign=portal](https://censo2022.ibge.gov.br/panorama/?utm_source=ibge&utm_medium=home&utm_campaign=portal)  
(2023 年 9 月 30 日閲覧)

<sup>6</sup>

[https://www.ine.pt/xportal/xmain?xpid=INE&xpgid=ine\\_indicadores&contecto=pi&indOcorrCod=0000256&selTab=tab0](https://www.ine.pt/xportal/xmain?xpid=INE&xpgid=ine_indicadores&contecto=pi&indOcorrCod=0000256&selTab=tab0) (2023 年 9 月 30 日閲覧)

## 2.2.1 音韻面

ヨーロッパポルトガル語（以降 PE: Português Europeu）では非強勢位置の母音は弱化が起り、a は[ə]、o は[u]と発音され、e の発音は省略される。モザンビークのポルトガル語（以降 PM: Português de Moçambique）では、特に e の弱化が起ららず、[e]と発音される。一方で、非強勢語末の-e は[i]と発音されることが多い。

表 2 非強勢母音弱化の例 (Gonçalves 2001 より筆者まとめ)

語彙	PE	PM
querido	[krídu]	[kirídu] or [kerídu]
pesado	[pzádu]	[pezádu]
pequenino	[pkninu]	[pekenínu]
disse	[díš]	[dísi]
fome	[fõm]	[fõmi]
debate	[dbát]	[debáti]

## 2.2.2 語彙面

語彙面では、現地語からの借用(1)、名詞を動詞化(2)、あるいは動詞を名詞化して PE には見られない語彙を新造する(3)、または既存の語彙を異なる意味で用いる(4)といった現象がみられる。

- (1) machamba (PE: campo)
- (2) confusionar (PE: fazer confusão), mobiliar (PE: mover), estilar (PE: exibir-se)
- (3) falagem (PE: fala), emprestaçāo (PE: empréstimo), ajudamento (PE: ajuda)
- (4) negar (=recusar), dialeto (=língua), etc.

（例及び例文は Gonçalves 2001, 2013 より、以下同）

## 2.2.3 統語語彙面

形態統語面では必要な前置詞の省略などによる自動詞の他動詞化(5)、直接目的語への前置詞 *a* の付加(6)、動詞補語名詞節の前への *de* や *para* の付加(7)(8)、再帰代名詞の省略(9)や過剰使用(10)などがみられる。

- (5) Ninguém protestou a iniciativa. (PE: *contra* a iniciativa)
- (6) A filha do imperador amou *ao* Manuel. (PE: amou o Manuel)
- (7) Toda a gente sabe *de* que um dirigente tem direito de regalias. (PE: sabe que)
- (8) Ordenou aos soldados *para* que avançassem. (PE: ordenou aos soldados que)
- (9) Ouvi um ruído e *assustei*. (PE: assustei-me)

(10) Uma pessoa já não *se aguenta* a jogar. (PE: não aguenta)

#### 2.2.4 統語面

統語面では、目的語代名詞の後置使用の過剰一般化(11)、一般名詞の無冠詞単数形の過剰使用(定冠詞の省略や無冠詞複数形の単数化)(12)(13)、接続詞語彙への *que* の過剰付加(14)が挙げられている。

(11) Há pessoas que *opõem-se* à religião. (PE: que se opõem)

(12) Faço *bebida*. (PE: bebidas)

(13) Baixar *preço*, também acho que não é solução. (PE: o preço)

(14) ... embora *que* não sou conhecida. (PE: embora)

#### 2.2.5 形態統語面

形態統語面では人称不定詞の過剰使用(15)、一部の接続法表現への直説法の使用(16)、直接目的語への間接目的語代名詞(*lhe*)の過剰使用(17)、動詞の3人称単数形の過剰使用(18)が挙げられている。

(15) Os professores não conseguem *darem* as aulas. (PE: dar)

(16) Talvez eu *tenho* vocação. (PE: tenha)

(17) Levam a miúda para o quarto, vestem-*lhe*. (PE: vestem-na)

(18) Tu *quer* mesmo ir com aquele rapaz? (PE: queres)

#### 2.2.6 まとめ

以上の特徴をもって、Gonçalves (2001, p.987) は PE と PM との間に体系的な差異が確かに存在するとし、理想的な規範である前者に対して PM 話者の大多数が示す傾向を「現実的な規範」として位置付けている。ただし、Gonçalves は基層言語の影響により依然 PM 話者のパフォーマンスが多様であることが「PM の規範」を確立するうえでの課題としている。すなわち、以上の特徴は傾向であり、すべての話者がすべての特徴を使用するわけではない。それでも、本稿筆者は今後もポルトガル語の母語話者数が増加していく中でこれらの特徴が取捨選択されていき、改めて「PM の規範」が定まってくる可能性は十分にあるのではないかと考える。

### 2.3. 「新たな」モザンビークのポルトガル語の特徴

前節では Gonçalves (2001, 2013) に従って PM の特徴をまとめたが、筆者は 2018 年から 2020 年まで 2 年間モザンビーク (マプート市) で勤務した経験から、Gonçalves がまとめていない特徴として、以下の 3 点に着目した。

1 つめは、未来の迂言表現として「*haver de + 不定詞*」の使用頻度が、特に話し言葉で

高いことである。ポルトガル語において未来の迂言表現は他のロマンス語と同様、英語の *go* に相当する *ir* を用いた「*ir + 不定詞*」が話し言葉でも書き言葉でも用いられる(19)。これに対し、PM では通常は義務などのモダリティを表現する「*haver de + 不定詞*」が未来の迂言表現として好まれるようである(20)。

(19) Peço desculpas, o prato *vai chegar já!*

(20) Peço desculpas, o prato *há de chegar já!*

(例文は本稿筆者の経験に基づく作例、以下同)

2 つめは聞き手の人称についてである。現代のポルトガルでは親称として代名詞は *tu*、動詞は二人称の語形変化を用い、非親称として代名詞に *você*などを用いて、動詞は三人称の語形変化を用いる。一方でブラジルでは話し相手への代名詞は多様ながら、動詞は三人称活用に収斂される。Gonçalves (2001, 2013) は PM の特徴として代名詞の形式に関わらず動詞の三人称単数形の過剰使用傾向を挙げているが(18)、筆者が感じたところでは個人差があり、本来親称である *tu* と二人称動詞を上位を含めてすべての人に用いる(21)話者や、逆に本来非親称である三人称動詞を親しい人を含めたすべての人に用いる(22)話者がいる。

(21) Chefe, onde estás *tu*?

(22) Ó Juanito, você marca quem?

3 つめは、地名の名詞への定冠詞の共起の不規則性である。ポルトガル語では例外があるものの、地名には定冠詞が共起する。これに対し、PM では地名への定冠詞の共起が不規則である印象を受けた。

(23) Niassa / o Niassa ニアッサ(州)

(24) Matola / a Matola マトーラ(市)

本稿では 3 点目の地名への定冠詞の共起に着目し、調査する。1 点目と 2 点目については大規模な話し言葉データを収集する必要があり、今後の課題としたい。

## 2.4 ポルトガル語における地名と定冠詞の共起

研究設問に先立ち、本節ではポルトガル語における地名への定冠詞の共起について、Cunha & Cintra (2007) に従ってまとめる。

まず、国名には原則定冠詞が共起する(25)。ただし、ブラジルとギニアビサウを除く旧ポルトガル領の国や、一部の国を除く(26)。また、欧州の一部の国名では、*de* や *em* などの定冠詞と縮合する前置詞に続く場合は、定冠詞の使用は選択的となる(27)。

- (25) o Brasil, a França, os Estados Unidos
- (26) Portugal, Moçambique, Angola, Cuba, Israel
- (27) na/em Espanha, da/de França

次に、町の名前には原則として定冠詞は共起しない(28)。ただし、porto(港) や praia(海岸) など一般名詞と同形の町の名前は定冠詞が共起する(29)。

- (28) Lisboa, São Paulo, Barcelona, Paris, Tóquio, Londres, Nova Iorque
- (29) o Rio de Janeiro, o Porto, a Guarda, a Praia

また、ブラジルの州 (*estado*) 名は定冠詞が共起するものとしないものがある(30)(31)。ポルトガルの県 (*distrito*) 名は原則都市名に従うため、定冠詞が共起しないが、地域名(旧県名)は一部を除いて定冠詞と共に起する(32)。

- (30) o Acre, o Paraná, o Rio Grande do Norte, etc.
- (31) Alagoas, Pernambuco, Minas Gerais, etc.
- (32) o Alentejo, o Algarve, o Douro, etc.

その他、大陸、地域、山、砂漠、川、湖、海、島などの名称には定冠詞が共起する(33)。

- (33) a África, o Nordeste, os Alpes, o Saara, o Nilo, o Mediterrâneo, o Atlântico, os Açores, etc.

以上は Cunha & Cintra がまとめた文法規則であるが、運用レベルでは言語内外的要因により定冠詞の共起に差があることが想定される (cf. Brito 2001, p.552)。なお、地名との共起ではないが、近接するテーマとしてブラジルポルトガル語における定冠詞と人名の固有名詞との共起に関し、意味論 (e.g Müller & Negrão 1989)、生成文法 (e.g. Serdins 2017)、及び社会的観点 (e.g. Guedes 2019, Lima & Morais 2019) からの研究事例が確認できる。

## 2.5. 研究設問

以上を踏まえ、本稿の研究設問は以下のとおりである。

### (研究設問 1)

モザンビークの地名に共起する冠詞について、規則や傾向がみられるのか。これについて、大規模データに基づいて調査する。調査対象はモザンビークの 10 の州名とその州都名(10 都市)、及び 53 の市町名とする。なお、53 の市町に含まれない地区 (*distrito*) 名については、それぞれのサンプル数が少なすぎるため、本稿では割愛する。

## (研究設問 2)

地名と定冠詞の共起に何らかの傾向が見られた場合は以下に着目する。

### (仮説 1)

特に、州名と州都名や市名が重複している場合、いずれかに定冠詞が共起するような傾向がみられる。

### (仮説 2)

定冠詞が共起する都市名は現地語で何か特別な意味を示す。

## 3. 方法

### 3.1. データ

本稿では大規模書き言葉データの分析を通じて、地名への定冠詞の共起を調査する。使用するデータはモザンビークの政府系新聞 *Notícias*<sup>7</sup>の記事である。使用する記事は2018年1月1日から2019年12月31日にかけての2年分、17,279,571語である。データはプレーンテキストで、品詞タグ付けなどのコーパス化の処理は行っていない。なお、PDFデータから変換しており、新聞特有の段組みレイアウトのなど影響により途中で文が途切れたり、広告が挿入されてしまうなど、一部不完全な文章が含まれているため、統語分析を行うには正確なデータとはいえないところがある。

### 3.2. 分析

新聞データの中から州名、州都名、市町名を抽出する。州名はCabo Delgado(カーボデルガード)、Niassa(ニアッサ)、Nampula(ナンプーラ)、Zambézia(ザンベジア)、Tete(テテ)、Manica(マニッカ)、Sofala(ソファラ)、Inhambane(イニヤンバネ)、Gaza(ガザ)、Maputo(マプート)の10州である。州都名は10であるが、Nampula、Tete、Inhambaneの3州は州名と州都名が重複しているため、7の州都名を対象とする。さらに、53の市町にはマプート市及び10の州都が含まれ、また、Manica州にManica市があるため、これらの12市を引いた41市町を対象とする。以上より、58の地名を調査対象とする。

データの分析には*AntConc*<sup>8</sup>を用いて対象の地名を一つずつ検索し、Collocates機能を用いて、検索語彙の左側1語の共起語彙を二次検索した。この二次検索語群から、①定冠詞(*o*または*a*)があるか、②前置詞と共に起しているか(*de*、*em*、*por*、*a*<sup>9</sup>)、前置詞と定冠詞の縮合形(*do(s)*、*da(s)*、*no(s)*、*na(s)*、*pelo(s)*、*pela(s)*、*ao(s)*、*à(s)*)と共に起しているかに着眼した。ただし、*por*、*pelo(s)*、*pela(s)*、*ao(s)*、*à(s)*については全体的に産出がほとんどなかったため、以降は割愛する。

<sup>7</sup> <https://jornalnoticias.co.mz/>

<sup>8</sup> <https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>

<sup>9</sup> なお、女性定冠詞の*a*と前置詞の*a*は形式が重複するため、微妙な場合は実際の文(コンコーダンスライン)を見た。

## 4. 結果

### 4.1. 州名

まず、*Notícias* 紙のデータから 10 の州名と定冠詞との共起を見ていく。結果は以下の表 3 のとおりである。

表 3 モザンビークの州名と定冠詞の共起

州名	total	o	a	em	no	na	de	do	da
Cabo Delgado	5080		31	921			2593	8	
Niassa	4807	4	13		648			2124	
Nampula	13872		77	1355	2		8363	5	14
Zambézia	5323		35	11		560	109	2	2460
Tete	7903	18	42	702	1	3	3919	4	10
Manica	4806	1	25	543	1	2	2219		12
Sofala	4650		13	718			2243		3
Inhambane	5846	5	22	413	1		3007	5	3
Gaza	5365	1	17	492			2909	3	7
Maputo	51071	25	235	5406	52	5	25387	202	59
Total		375442	509038	190728	166518	145424	1189289	326371	297391

結果から、モザンビークの州名には基本的に定冠詞は共起しない傾向が強いことが分かった。出現頻度が高い Maputo や Nampula を除くと、おおむね約 5,000 の出現例のうち、定冠詞が共起しているのは 100 未満 (2%未満) である。例外は Niassa と Zambézia で、それぞれ男性、女性の定冠詞が共起する傾向が強い。

なお、研究設問 2 の仮説 1 について、州名と州都名が重複する Nampula、Tete、Inhambane 及び同名の市を有する Manica の 4 例では特に傾向が見られなかった。

### 4.2. 州都名

次に州都名と定冠詞の共起を見ていく。結果は以下の表のとおりである。

表 4 モザンビークの州都名と定冠詞の共起

都市名	州名	total	o	a	em	no	na	de	do	da
Pemba	Cabo Delgado	3602		15	333		2	1762		6
Lichinga	Niassa	2260		17	156			866		
Nampula	Nampula	13872								

Quelimane	Zambézia	2756	13	345		1088		
Tete	Tete	7903						
Chimoio	Manica	2331	7	256	1	859	5	
Beira	Sofala	9568	67	4	2	677	27	4
Inhambane	Inhambane	5846						6214
Xai-xai	Gaza	2636	11	9	224	5	1232	11
Matola	Maputo	6592	40	3		718	58	3227
Total		375442	509038	190728	166518	145424	1189289	326371
								297391

表 4 より、モザンビーグの州都名にも基本的には定冠詞は共起しないことがわかった。例外は Sofala 州都の Beira と Maputo 州都の Matola である。

### 4.3. 市町名

最後に市町名と定冠詞の共起について見ていく。まずは Maputo、Gaza、Inhambane の南部 3 州の市町について見ていく (表 5)。

表 5 モザンビーグの南部 3 州の都市名と定冠詞の共起

都市名	州名	total	o	a	em	no	na	de	do	da
Boane	Maputo	1525		9	104			899		2
Manhiça	Maputo	1874				73	89	5	454***	
Namaacha	Maputo	874			34	34	240			210***
Chibuto	Gaza	1396	118	15	84			437	167***	
Chókwè	Gaza	648		5	74	21		318		
Macia	Gaza	365				24				128
Manjacaze	Gaza	221			32			114		
Bilene	Gaza	450				15		197	121***	
Massinga	Inhambane	896		7	25		24	358		136***
Maxixe	Inhambane	1070				39	182		376***	
Quissico	Inhambane	186			23			120		
Vilankulo	Inhambane	1032			87	1		419	5	3
Vilanculos	Inhambane	472		3	15					
total		375442	509038	190728	166518	145424	1189289	326371	297391	

カイニ乗検定の結果  $p < 0.001$  で有意に大きい

南部 3 州では Maputo 州 2 市町、Gaza 州 4 市町と Inhambane 州 2 市町で定冠詞の使用

が見られた。ただし、いずれも定冠詞単体との共起は多くなく、前置詞と定冠詞の縮合形(*do(s)*、*da(s)*、*no(s)*、*na(s)*)との共起が主である。また、いずれも定冠詞を伴わない前置詞 *em* 及び *de* と共に起している例も多くみられるが、カイ二乗検定の結果定冠詞との縮合形との結びつきが強い。

続いて中部3州(表6)及び北部4州(表7)を見ていく。

表6 モザンビークの中部3州の都市名と定冠詞の共起

都市名	州名	total	o	a	em	no	na	de	do	da
Dondo	Sofala	586		2	21	32		180	90***	1
Gorongosa	Sofala	716	1		77		30	153	2	254***
Marromeu	Sofala	213			29			85		
Nhamatanda	Sofala	373		1	42			170		
Catandica	Manica	98			9			24		
Gondola	Manica	399			37			187		
Sussundenga	Manica	284						133		
Moatize	Tete	645			31			390		
Nhamayabué	Tete	6								
Ulongué	Tete	13						7		
total		375442	509038	190728	166518	145424	1189289	326371	297391	

カイ二乗検定の結果  $p < 0.001$  で有意に大きい

表7 モザンビークの北部4州の都市名と定冠詞の共起

都市名	州名	total	o	a	em	no	na	de	do	da
Alto Molócué	Zambézia	245			15			116		
Gurué	Zambézia	140						85		
Maganja	Zambézia	383					11	84		78***
da Costa										
Milange	Zambézia	393			20			177		
Mocuba	Zambézia	941			63			507		2
Angoche	Nampula	730		7	44			357	1	
Ilha	Nampula	448			35		85			185
de Moçambique										
Malema	Nampula	415			30			175		
Monapo	Nampula	517			41			309		1

Nacala Porto	Nampula	605	1	124	293				
Ribaué	Nampula	32			23				
Cuamba	Niassa	1019	11	98	431	1			
Mandimba	Niassa	318		21	146				
Marrupa	Niassa	414	2		154				
Metangula	Niassa	103		8	65				
Chiúre	Cabo	290		23	167				
	Delgado								
Mocímboa	Cabo	317	2	21	32	180	90***	1	
da Praia	Delgado								
Montepuez	Cabo	898	1	10	57	465	1		
	Delgado								
Mueda	Cabo	380		1		231			
	Delgado								
total		375442	509038	190728	166518	145424	1189289	326371	297391

カイ二乗検定の結果  $p < 0.001$  で有意に大きい

中部では Dondo、Gorongosa、北部では Maganja da Costa、(Ilha de Moçambique)、Mocimboa da Praia の合計 5 例で、合計 8 例の南部州の地名と比較して定冠詞と共に起しやすい地名は少なかった。

## 5. 考察

2 の結果を改めてまとめると、まず大部分の州名及び都市名は定冠詞を伴わないことが分かった。州名で定冠詞を伴うのは Niassa と Zambézia、州都名では Matola と Beira、その他の都市名では 42 都市のうち 13 都市が定冠詞と共に起し、うち 8 例が南部 3 州、2 例が中部 3 州、3 例が北部 4 州であった。

### 5.1. 定冠詞を伴う語彙

比較的はっきりと定冠詞が使われる例としては州名の Niassa と Zambézia、州都名の Matola と Beira、都市名では Macia と Manhiça (ともにマプート州)、Ilha de Moçambique であった。このうち、Beira、Macia はポルトガル語の一般名詞と共に通している。また、Ilha de Moçambique は島名でもあり、地名への定冠詞のルールに沿っている(32)。

Niassa、Zambézia、Matola で定冠詞が使われる理由としては、同様の地名と区別するためである可能性が考えられる。Zambézia は現在のジンバブエもかつて名乗っていた。Niassa も隣接するマラウイが植民地時代に Niassaland と呼ばれていた。また、Matola は隣接する Boane 市に Matola-Rio という地名がある。ただし同様の例として、ナンプーラ州の Nacala Porto 市では隣接して Nacala-à-Velha 地区 (非特別区) が存在するが、いずれ

も定冠詞を伴わない。

また、別の理由として、現地の言葉で一般名詞と共に通している語彙であるために定冠詞を伴う可能性がある。例えば Niassa は同州内で話されるニヤンジャ語で「湖」を意味する。ただし、同州州都の Lichinga は同市付近で話されるヤオ語で「囲い」の意味があるが、こちらには定冠詞が共起しない。

## 5.2. 定冠詞の使用と不使用が分かれる語彙

Macia、Manhiça、Ilha de Moçambique を除く 10 の非州都の都市名は定冠詞の使用と不使用が分かれた。カイ二乗検定を行った結果では定冠詞の使用が有意に多かったが、それでも定冠詞を伴わない形も多く使われている。

これらについて、AntConc の検索結果から実際の使用例に目を通したところ、Chibuto については同市のサッカークラブ名を指す文脈で定冠詞を伴っていることが多く、単純に地名として用いられる場合は定冠詞を伴わないことが多かった。それ以外の地名については、用例を見たところ明確な傾向はみられなかった。そのため、特にこれらの地名が前置詞に続く場合において、定冠詞の使用（縮合形）と不使用（単純な前置詞）が混交している状況にあると考えられる。ただし、今後は長い時間をかけていざれかに収斂していくものと予測する。

## 5.3. 南北の使用差について

定冠詞を伴う地名は、州都以外の都市名については南部に多い傾向が見られたが、これについて考察する。例えば、北部州ではあるものの Niassa の例のように、基本的には現地語での一般名詞語彙と同形の地名にポルトガル語の規則を援用して定冠詞が共起しているものと考える。ただし、同州都 Lichinga のように、現地語で意味を持っていても「知られていない」場合は定冠詞がつかない可能性がある。これを踏まえると、南部に定冠詞を伴う地名が多いのは、首都のマプートに近いことがその要因のひとつと考えられる。首都のマプートは植民地時代から首都であり、また、独立以降一貫してモザンビークの政権を担う与党 FRELIMO には現地語（ツウォンガ語及びその変種のシャンガナ語など）を共有する南部出身者が多く、彼らが文化的・教育的中枢を担っているために、ポルトガル語にした際に定冠詞を伴っていると仮説する。一方で、北中部の現地語は旧植民地政府にも現モザンビーク政府にも未知であるところが多いため、現地語で一般名詞と共に通しても定冠詞を伴わないことが多いのではないかと推測する。

以上の考察、仮説について、今回は北部のニヤンジャ語とヤオ語についてのみしか確認ができなかったため、今後の課題としたい。

## 6. おわりに

本稿ではモザンビークのポルトガル語における地名と定冠詞の共起について、大規模データに基づいて検証してきた。研究設問 1 に対する結果として、モザンビークの地名

名詞は原則通り、基本的には定冠詞を伴わないことがわかった。ただし一部、ほぼ必ず定冠詞を伴う地名と、特に前置詞の後で定冠詞を伴う場合（前置詞との縮合形）と伴わない場合（単純な前置詞）が混在している地名が存在することもわかった。ほぼ必ず定冠詞を伴う地名は主に一部の州名や州都（大都市）名で、隣国や近隣に同名の地名がある場合や現地語で一般名詞である場合が考えられる（研究設問2①）。定冠詞の伴う場合と伴わない場合がある地名は、特に南部の小規模な市町に多い。これは現地語を共有するモザンビーク首都圏と近いため、一般名詞と同形と認識されやすいことが影響していると筆者は仮説する。

本研究の今後の課題としては、引き続きモザンビークの現地語における地名の意味を確認することが挙げられる。特に中部の言語についてはインフォーマントの確保が難しいことが予想される。また、今回は政府系新聞の *Notícias* をソースとしたが、これが必ずしも現代の PM を代表するテクストであるとは言い切れないため、これ以外の言語リソースを分析していくことも必要である。

また、本テーマに限らず PM を研究する際の課題として、今後母語話者数の増加とともに PM の規範がさらに確立されていくことが考えられるため、長期間フォローして変化をモニターしていくことも重要である。加えて、地域差を考慮することも重要である。筆者は主に国土の南端にある首都マプートで大半の時間を過ごしてきたため、これ以外の地域のポルトガル語の特徴を把握できていない。本研究のソースは全国に支局がある政府系新聞であるが、やはり首都の本社が大きな影響力を持っている機関である。モザンビークは日本の約 2 倍の国土があるが、交通インフラが脆弱なため、全国規模の人の移動は活発ではない。そのため、基層言語や文化、風土が異なる各地のポルトガル語には、当然様々な差異が存在するものと考えられる。Gonçalves (2001, 2013) の先行研究も地域差を考慮せずにまとめているが、地域差を踏まえると、新たな発見や、多様に見える特徴がさらに整理されるかもしれない。

## 謝辞

本研究にあたり、分析するモザンビークのポルトガル語ソースとして記事の利用を許可いただいた *Notícias* 紙のジュリオ・マンジャッテ (Júlio Manjate) 社長（当時）、ニアッサ州やカーボデルガード州の地名の現地語における意味についてコメントをいただいたルリオ大学のルイス・ペレイラ・ドミンゴス (Luís Pereira Domingos) 先生、及び同先生をご紹介いただいた愛媛大学の栗田英幸先生に御礼申し上げます。

## 参考文献

- Brito, A. M. (2001). Presença/ausência de Artigo antes de Possessivo no Português do Brasil. *Actas do XVI Encontro da Associação Portuguesa de Linguística*, 551-575.
- Cunha, C. & Cintra, L. F. L. (2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Rio de Janeiro: Lexikon.

- Gonçalves, P. (2001). « Panorama Geral do Português de Moçambique ». *Revue Belge de Philologie et d'Histoire*, tome 79, fasc 3, 977-990.
- Gonçalves, P. (2013). « O Português em África ». In Raposo, E. B. P.; Bacelar do Nascimento, M. F.; Mota, M. A. C.; Segura, L.; & Mendes, A. (eds). *Gramática do Português, Volume I*. Pp. 155-178. Lisboa: Fundação Calouste Gulbenkian.
- Guedes, S. (2019). Emprego do Artigo Definido em Situação de Contato Dialetal: um Estudo da Fala de Migrantes Paraibanos em São Paulo. *Domínios de Lingu@gem*, 13(4), 1401-1432.
- Instituto Nacional de Estatística (Moçambique). (1997). *País Total, 1º Recenseamento Geral da População e Habitação*.
- Instituto Nacional de Estatística (Moçambique). (2022a). *IV Recenseamento Geral da População e Habitação 2017*. <https://www.ine.gov.mz/web/guest/d/indicadores-socio-demograficos-mocambique-20062022>
- Instituto Nacional de Estatística (Moçambique). (2022b). *Quadro 22. Populacao de 5 Anos e Mais por Idade, Segundo Área de Residencia, Sexo e Língua Materna, Moçambique 2017*. <https://www.ine.gov.mz/web/guest/d/quadro-22-populacao-de-5-anos-e-mais-por-idade-segundo-area-de-residencia-sexo-e-lingua-materna-mocambique-2017>
- Instituto Nacional de Estatística (Moçambique). (2022c). *Quadro 24. População de 5 Anos e Mais por Condição de Conhecimento da Língua Portuguesa e Sexo, segundo Área de Residência e Idade, Moçambique, 2017*. <https://www.ine.gov.mz/web/guest/d/quadro-24-populacao-de-5-anos-e-mais-por-condicao-de-conhecimento-da-lingua-portuguesa-e-sexo-segundo-area-de-residencia-e-idade-mocambique-2017>
- Lima, A. F. & Moraes, R. N. (2019). Uso do Artigo Definido diante de Nome Próprio nas Capitais do Norte do Brasil. *Revista Moara*, n. 54, ago-dez 2019, 69-93.
- Müller, A. L. P. & Negrão, E. V. (1989). O Uso do Artigo Definido antes do Nome Próprio em Português: uma Análise Semântica. *Estudos Linguísticos Anais de Seminários do Grupo de Estudos Linguísticos*, 8, 530-540.
- Serdins, A. P. (2017). Nomes Próprios e Artigos Definidos no Português Brasileiro. *Revista Letras*, 96, 239-254.

(最終原稿受理日 2024 年 3 月 21 日)

(とりごえ しんたろう / 大阪大学)